

『伊勢物語』『初冠』

1、はじめに

・作者…未詳

・成立…平安時代〔平安時代は794～1185年〕

・ジャンル…歌物語

・特徴…歌とそれに基づいた話を交えて書かれる歌物語。全125段からなる。多くの段で「むかし、男」の冒頭句からはじまる。その男は、実在した在原業平(ありわたしのなりひら)がモデルではないかといわれている。

・要約

昔、元服したばかりの男がいて、春日の里という古い都に狩りに行った。そこには、若く美しい姉妹がいて、男はそれを垣間見て恋惑った。そして男は着ていた忍摺りの狩衣の裾を破り、あなたたちを見てこの忍摺りの模様のように心が乱れましたという和歌を送った。この歌は、古歌を踏まえて詠まれたものであった。昔の人はこのように、恋心を趣向・即興性に優れた歌によって伝える「みやびな振る舞い」をした。

2. 1、本文

昔、男、初冠うひかぶりして、奈良の京、春日の里かすがに、領しるよしして、狩りに往いにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間かいまみ見てけり。思ほえず、古里ふるさとにいとほしたなくてありければ、心地まに惑まひにけり。男の、着かたりける狩衣かりまぬの裾すそを切りて、歌を書かきて遣やる。その男、忍摺しのすりの狩衣をなむ着かたりける。

春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ限り知られず

となむ、おひしまて言ひやりける。しらでおもころまことともや思ひけむ。

陸奥むつの忍しのもち摺すり誰たゆゑに乱れそめにし我わならむな

といふ歌の心ば入なり。昔人むかしは、かく、いちはやまきみやびをなむしける。

2. 2、本文

昔、男^{※1}、初冠^{※2}して、奈良の京、春日の里^{※3}に、領る^{☆1}よしして、狩りに往にけり。

その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。思ほえず^{☆2}、

古里^{※4}にいとほしたなく^{☆3}てありければ、心地感ひにけり。男の、着たりける狩衣^{※5}の裾

を切りて、歌を書きて遣る。その男、忍摺りの狩衣をなむ着たりける^{※6}。

春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ^{※7}限り知られず

となむ、おひしまて^{※8}言ひせりける。しづめで^{☆4}おせしるまいとともや思ひけむ。

陸奥の忍もち摺り誰ゆゑに乱れそめにし我ならむ^{※9}

といふ歌の心ば入^{☆5}なり。昔人は、かく、いちはやまきみやび^{※10}をなむしける。

3、補足・注／重要単語・文法

【補足・注】

※1男…在原業平。

序詞があるかもしれないので要確認。↓「春

※2初冠…元服。男性の場合十二～十五歳く

日野の若紫の摺り衣」が序詞。

らい。女性は十二～十四歳くらい。

※8おいつきて…「進らつきて」と「きづびき

※3春日なる里…奈良市春日野のあたり。

て」の説があり、前者は「すべ」で、後者は「大

※4古里…かつて都のあった場所。

人ぶつて」のよつになる。

※5狩衣…もとは狩りの時の衣服。のちに普

※9陸奥のゝ我ならなく「…」忍もぢ摺り

段着として定着する。

は「忍摺り」「同じ」。「陸奥のゝ誰ゆゑ」が

※6その男、く着たりける…いわゆる挿入句。

序詞。「そめ」が「染め」と「初め」の掛詞。

歌の直前にあることから、歌を解釈するうえで

「そめ（染め）」が「忍もぢ摺り」の縁語。

でここを踏まえないといけない。

※10いちはやまみやび…激しいまでの風流

※7このぶの乱れ…「このぶ」は『忍』摺り

わ。

と「恋』惚ぶ』の掛詞。なお、掛詞の前には

【重要単語・文法】

☆1 領る…領有する。治める。

中途半端だ。(

☆2 思ほえず…意外に。思いもよらず。

☆4 ついで…事の次第。(順序。機会。(

☆3 はしたなく…不似合い。(ままりが悪い。

☆5 心ばへ…趣向。(気遣い。(

4、現代語訳

昔、男が元服して、奈良の京の、春日の里に領有している関係で、狩りに行った。その里に、とても美しい姉妹が住んでいた。この男は、のぞき見をした。意外にも、すさんだ京に全く不似合いであったので、(男の)心は混乱した。男が来ていた狩衣の裾を切って、歌を書いて(姉妹のもとに)送った。その男は、忍摺りの狩衣を着ていた。

春日野の若い紫草で摺って染めた狩衣の忍摺り(=ねじれ乱れたような模様)のように、若く美しいお二人によって染められた私の心の乱れも限りをしりません。

と詠んで(すぐに)大人が(う)送った。事のしだいを面白いことだと思ったのでしょうか。

陸奥の忍もじ摺りのように、私の心は誰のせいでも乱れ染められているのか(=始めているのか)、私のせいではないのか(=あなたのせいなのか)

という歌の趣向である。(在原業平のように)昔の人は、このような、(恋心を趣向・即興性に優れた歌によって伝える)激しい「みやびな振る舞い」をした。

5. 1、本文と現代語訳

昔、男が元服して、奈良の京の、春日の里に領有している関係で、狩りに行った。その里に、

昔、男、初冠うひかうぶりして、奈良の京、春日かすがの里に、領しるよしして、狩りに往ゆにけり。その里に、

とても美しい姉妹が住んでいた。この男は、のぞき見をした。意外にも、すさんだ京に全く不似

いとなまめいたる女はうから住みけり。この男、垣間かいまみ見てけり。思ほえず、古里ふるさとにいとほし

合いであつたので、(男の)心は混乱した。男が来ていた狩衣の裾を切つて、歌を書いて(姉妹のもとに)送つた。

たなくてありければ、心地まご惑まどひにけり。男の、着たりける狩衣かりかみぬの裾すそを切りて、歌を書きて遣や

その男は、忍摺りの狩衣を着ていた。

る。その男、忍摺しのすぢりの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若い紫草で摺つて染めた狩衣の忍摺り(＝ねじれ乱れたような模様)のように、若く美しいお二人によつて染められた私の心の乱れも限りをしりません。

春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ限り知られず

と詠んで「すべに／＼大人ぶつて」送つた。事のしだいを面白いことだと思つたのでしようか。

となむ、おひしまつて言ひやびひする。しるべおもつるまじごとともや思ひひむ。

陸奥の忍もじ摺りのように、私の心は誰のせいぞ乱れ染められているのか(＝始めているのか)、私のせいではないのか(＝あなたのせいなのか)

陸奥むつの忍しのもじ摺すぢり誰たれもゑに乱れそめじし我なりならず

とこの歌の趣向である。(在原業平のように)昔の人は、このような(恋心を趣向・即興性に優れた歌によつて伝える)激しい「みやびな振る舞い」をした。

とつふ歌の心ば入なり。昔人は、かへ、つちちはやまきみやびをなむせける。

5. 2、本文と現代語訳

昔、男が元服して、奈良の京の、春日の里に領有している関係で、狩りに行った。

昔、男^{※1}、初冠^{※2}して、奈良の京、春日の里^{※3}に、領る^{☆1}よして、狩りに往にけり。

その里に、とても美しい姉妹が住んでいた。この男は、のぞき見をした。意外にも、

その里に、いなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。思ほえず^{☆2}、

すさんだ京に全く不似合いであつたので、(男の)心は混乱した。男が来ていた狩衣の裾

古里^{※4}「いとほしたなく^{☆3}てありければ、心地感ひにけり。男の、着たりける狩衣^{※5}の裾

を切つて、歌を書いて(姉妹のもとに)送つた。その男は、忍摺りの狩衣を着ていた。

を切りて、歌を書きて遣る。その男、忍摺りの狩衣をなむ着たりける^{※6}。

春日野の若い紫草で摺つて染めた狩衣の忍摺り(＝ねじれ乱れたような模様)のように、若く美しい

お二人によつて染められた私の心の乱れも限りをしりません。

春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ^{※7}限り知られず

と詠んで「すべに／＼大人がうて」送つた。事のしだいを面白いことだと思つたのでしようか。

となむ、ならしめて^{※8}言ひせむ^{☆4}。せいで^{☆4}なむおもひせむ。

陸奥の忍もじ摺りのように、私の心は誰のせいぞ乱れ染められているのか(＝始めているのか)、私のせいではないのか(＝あなたのせいなのか)

陸奥の忍もじ摺り誰ぞに乱れせめて^{※9}我なりなへ^{※9}。

とこの歌の趣向である。(在原業平のように)昔の人は、このような(恋心を趣向・即興性に優れた歌によつて伝える)激しい「みやびな振る舞い」をした。

といふ歌の心ば入^{☆5}なり。昔人は、かく、いちはやまみやび^{※10}をなむしける。

6、品詞分解

単語	品詞等
昔、	名詞
男、	名詞
初冠	名詞
し	動詞・サ変・連用形
て、	接続助詞
奈良	名詞
の	格助詞
京、	名詞
春日	名詞
の	格助詞
里	名詞
に、	格助詞
領る	動詞・四段・連体形
よし	名詞
して、	格助詞
狩り	名詞
に	格助詞
往に	名詞・ナ変・連用形

けり。	助動詞・過去・終止形
そ	代名詞
の	格助詞
里	名詞
に、	格助詞
いと	副詞
なまめい	動詞・四段・連用形(イ音便)
たる	助動詞・存続・連体形
女はらから	名詞
住み	動詞・四段・連用形
けり。	助動詞・過去・終止形
こ	代名詞
の	格助詞
男、	名詞
垣間見	動詞・上一段・連用形
て	格助詞
けり。	助動詞・過去・終止形
思ほえ	動詞・下二段・未然形
ず、	助動詞・打消・連用形
古里	名詞

に	格助詞
いと	副詞
はしたなく	形容詞・ク活用・連用形
て	接続助詞
あり	動詞・ラ変・連用形
けれ	助動詞・過去・已然形
ば、	接続助詞
心地	名詞
惑ひ	動詞・四段・連用形
に	助動詞・完了・連用形
けり。	助動詞・過去・終止形
男	名詞
の、	格助詞
着	動詞・上一段・連用形
たり	助動詞・存続・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
狩衣	名詞
の	格助詞
裾	名詞
を	格助詞

切り	動詞・四段・連用形
て、	接続助詞
歌	名詞
を	格助詞
書き	動詞・四段・連用形
て	接続助詞
遣る。	動詞・四段・終止形
そ	代名詞
の	格助詞
男、	名詞
忍摺り	名詞
の	格助詞
狩衣	名詞
を	格助詞
なむ	係助詞（係）
着	動詞・上一段・連用形
たり	助動詞・存続・連用形
ける。	助動詞・過去・連体形（結）
春日野	名詞
の	格助詞

若紫	名詞
の	格助詞
摺り衣	名詞
しのぶ	名詞（掛詞）
の	格助詞
乱れ	名詞
限り	名詞
知ら	動詞・四段・未然形
れ	助動詞・可能・未然形
ず	助動詞・打消・終止形
と	格助詞
なむ、	係助詞（係）
おひつき	動詞・四段・連用形
て	接続助詞
言ひやり	動詞・四段・連用形
ける。	助動詞・過去・連体形（結）
ついで	名詞
おもしろ	形容詞・ク活用・連体形
き	
こと	名詞
と	格助詞

も	係助詞
や	係助詞（係）
思ひ	動詞・四段・連用形
けむ。	助動詞・過去推量・連体形（結）
陸奥	名詞
の	格助詞
忍もち摺り	名詞
誰	代名詞
ゆゑ	名詞
に	格助詞
乱れそめ	動詞・下二段・連用形（掛詞）
に	助動詞・完了・連用形
し	助動詞・過去・連体形（結）
我	代名詞
なら	助動詞・断定・未然形
なくに	連語
と	格助詞
いふ	動詞・四段・連体形
歌	名詞
の	格助詞

心ばへ	名詞
なり。	助動詞・断定・終止形
昔人	名詞
は、	係助詞
かく、	副詞
いちはや き	形容詞・ク活用・連体形
みやび	名詞
を	格助詞
なむ	係助詞（係）
し	動詞・サ変・連用形
ける。	助動詞・過去・連体形（結）

春日野の若紫の摺り衣

しのぶの乱れ限り知られず

【解釈】

春日野の若い紫草で摺って染めた狩衣の忍摺り（＝ねじれ乱れたような模様）のようじ、若く美しいお二人によって染められた私の心の乱れも限りをしりません。

【修辞法】

○序詞…「春日野の若紫の摺り衣」

○掛詞

「しのぶ」…『忍』摺り」と「恋』惚ぶ』の掛詞。

○句切れなし

○縁語…「若紫」は「春日野」の縁語

○見立て…「若紫」を「姉妹」に見立てる

○歌枕…「春日野」

（○参考歌…「みちのくの〜」これを本歌取りとする説もあるが、あくまで筆者が推測している場面なのでこのこでは参考歌とする。

【重要単語・文法】

○「知ら』れ』ず」…助動詞「る」が可能の意味になるのは、打消の助動詞を伴うとき。

みちのく

陸奥の忍もぢ摺り誰ゆゑに

乱れそめにし／我ならなくに

【解釈】陸奥の忍もぢ摺りのように、私の心は誰のせいで乱れ染められてくるのか（＝始め
てくるのか）、私のせいではないのか（＝あなたのせいなのか）

【修辞法】

○序詞…「陸奥の忍もぢ摺り」

○掛詞

「**そめ**」…「染め」と「初め」

○四句切れ…三句目「誰ゆゑに」は本来「誰ゆゑにか」となるところ。「か」は疑問の係助詞なので、その係る「し」は連体形。

○倒置法…「我ならなくに」が意味上、「私のせいではないのに、そめられてしまった」となる。

○縁語…「乱れ」「染め」は「もぢ摺り」の縁語。

【補足】

○「なくに」…打消の助動詞「ず」の古い形の未然形「な」＋接尾語「く」＋助詞「に」